

みんぱく 私の逸品 蚊取り線香

蚊取り線香というと、大抵の人は渦巻型を思い浮かべるのではないだろうか。ところが、みんぱくの収蔵庫にあった蚊取り線香は、筆箱のような箱のなかに紙に巻かれた束が並ぶものであった。

わたしが子どものころ、夏の夜の必需品のひとつが渦巻型の蚊取り線香であった。蚊取り線香というと、豚の形をした容器に吊るして使う方法が紹介されることが多いが、我が家にはそのような洒落たものはなく、商品に付属した金具を使っていた。線香の中心に空いた穴に金具の先端を突き刺す作業が面白くて、わたしは進んでその作業をしていたのだが、仏壇の線香は棒なのに、なぜ渦巻き型を蚊取り線香とよぶのかと自問自答して、色が似ていて煙を立てることが同じだからだと納得した記憶がある。

その後、民俗資料を扱うことが仕事になり、蚊取り線香は、明治一〇年ごろに日本人が発明したものであることを知った。原料の除虫菊は、欧米では粉末にして撒かれていたのだが、これに火をつけて燻すとさらに効果があることを発見し、仏壇の線香からヒントをえて、粉末を棒状に固めることで製品化に成功した。しかし、棒だとすぐに燃え尽きてしまう。長時間燃やし続けることができないかと考えた結果、約一〇年後に考え出されたのが渦巻型だという。

ひとむかし前の博物館は、特別に古くて、優れていて、珍しいものを扱うところであった。みんぱく誕生のころから、そうではない日常生活の用具も大切な博物館資料であると考えられるようになったのだが、そのころには多くの生活用具が姿を消していた。とくに消耗品は残されていることが少なく、わたしは写真でしか棒状の蚊取り線香を見たことがなかった。

紙箱のなかの束をひとつ手にもってなかを覗くと、深緑色の棒が詰まっていた。その長さ、色合い、質感から、仏壇用の線香を真似て作ったことは一目瞭然である。実物を残しておくことの必要性を実感した一瞬であった。

標本番号 H0237009
地域 日本

民博 外来研究員 吉田 晶子

